

日本語感（観）、ご

らくご

落語には落ちがあるので落語。落ち語とは言わない。楽しい語で楽語とも言えるかな。テレビ番組のつるべ&ごこばのらくごのごが懐かしい。母はらくごがたいそう好きで、僕はどちらかというと吉本新喜劇。。。なのでらくごにはそれほど、いや全くと言っていいほど詳しくない。いや詳しくもなんでもない。しかし今日は少し勉強をした。落語の落ちにはいろいろな落ちの種類があるそうだ。

最近の若いもんは、落語なんかに見向きもせず。。。 どうなのか？ 落語は僕がじっくり耳を傾けていても理解しにくいというか難しいものが多く、笑えないことが多い。「ぼつん」となる。ん〜、やはり理解できないことは何事であっても面白くないというのが当てはまる。日本伝統の話芸、ことばのあや。。。記憶と斬れの達人（落語家）から繰り出される複雑で洗練された日本語についていくのは容易くない。興味を持ち努力をするということが必要なのだろう。簡単な方向へ進む、便利さにより単純化する傾向があるので。それが僕をも巻き込んで君臨する低脳化現象というものなのか。。。。

しかし日本を離れてなお今も遠く住む自分が日本から離れていることによって自分と日本語を見つめなおすきっかけがつかめただけマシかもしれない。

難しさを克服してこそその面白さ、すなわち真の心の面白さに親しみを感じ、震えを覚え、深さに浸り、身に芯が入るのではなかろうか。

お後がよろしいようで。。。？ 次回は名探偵コナンの西の探偵「服部平次」の大阪弁からヒントを得た方言の話でも。。。。

西田 賢司

2009年6月27日

サンホセ・コスタリカ